

THE SOCIETY FOR RESEARCH IN ASIATIC MUSIC

社団法人 東洋音楽学会 会報 第49号

発行(社) 東洋音楽学会〔事務所〕〒110-0001 東京都台東区谷中5-9-25 第2八光ハウス201号  
TEL.03-3823-5173 FAX.03-3823-5174 E-mail LEN03210@nifty.ne.jp

目次

|                                |                  |
|--------------------------------|------------------|
| 第51回大会のご案内.....1               | 定例研究会開催予定.....4  |
| 第51回大会の研究発表募集.....1            | 定例研究会発表募集.....4  |
| 第17回田辺尚雄賞受賞者発表.....2           | 定例研究会報告.....5    |
| 第61回通常理事会議決事項のお知らせ.....2       | 会員異動.....7       |
| 選挙管理委員会からのお知らせ.....2           | 図書・資料等の受贈.....9  |
| 第36回国際アジア・北アフリカ研究会議のお知らせ.....2 | 新刊書籍.....9       |
| 日本学術会議芸研連シンポジウムのお知らせ.....3     | 新発売視聴覚資料.....11  |
| 藤井知昭氏が第11回小泉文夫音楽賞を受賞.....3     | 前号の訂正とお詫び.....11 |
| 故仲芳樹氏を偲ぶ.....4                 | 編集後記.....11      |
| 会費納入のお願い.....4                 |                  |

第51回大会のご案内

社団法人東洋音楽学会は、本年度の大会を日本歌謡学会と合同で、下記の通り開催いたします。どうぞ奮ってご参加ください。

日時：平成12年10月7日(土)・8日(日)  
会場：金沢市文化ホール(金沢市高岡町15番1号)  
TEL(076)223-1221 / FAX(076)223-1299  
[交通] JR金沢駅よりタクシー10分 バス南町下車3分  
(徒歩約20分)  
小松空港より空港バス約40分 香林坊下車5分

10月7日(土)於：金沢市文化ホール  
(日本歌謡学会と共通プログラム)  
10時~13時 通常理事会  
13時~受付  
13時40分~ プレイバント：NEOKOTO(ネオ箏)演奏  
14時~ 公開講演会(題未定：小林輝治氏・三隅治雄氏)  
16時~ 公開公演(団七踊り・尾口村文弥人形)  
田辺尚雄賞授賞式(東洋音楽学会のみ)  
18時~ 合同懇親会(場所：金沢ニューグランドホテル  
/会場のすぐ前)

10月8日(日)於：金沢市文化ホール大会議室他  
9時40分~11時50分 研究発表4本×2会場  
(昼休みに役員連絡会)  
12時50分~14時10分 合同セッション「伝承を考える」  
14時20分~15時50分 第31回通常総会  
16時00分~17時00分 研究発表2本×2会場

|        |             |
|--------|-------------|
| 会費：参加費 | 1,000円      |
| 学生参加費  | 無料          |
| 懇親会費   | 5,000円      |
| 8日昼食代  | 1,000円(希望者) |

第51回大会の研究発表募集

第51回大会の研究発表会における口頭発表を下記の要領で募集します。多彩な発表を期待します。

- 発表時間：20分(厳守) 質疑応答：10分
- 申込方法：題目、要旨(横書：本文40字×30行程度=約1200字)、氏名、連絡先(住所、電話、ファックス、E-mailアドレス等)、使用希望機器、その他必要事項を明記の上、書面で下記大会事務局まで申し込んでください。その際、フロッピー(使用機種とフォーマット形式を明記)をお送りいただくと助かります。
- 申込締切：2000年6月20日(火)消印有効
- 採否決定：締切後、大会実行委員会で決定し、結果を申込者に通知します。
- 申込宛先：  
〒610-1197 京都市西京区大枝沓掛町13-6  
京都市立芸術大学附属日本伝統音楽研究センター気付  
(社)東洋音楽学会第51回大会実行委員会 宛  
TEL 075-332-0701(代)  
FAX 075-332-0709(日本伝統音楽研究センター宛  
と明記をお願いします)

[第51回大会実行委員会]

委員長：真鍋昌弘

委員：麻井紅仁子、家温美、井口はる菜、加藤富美子、  
久保田敏子、薦田治子、田井竜一、高橋美都、  
釣谷まゆみ、スティーブン・G・ネルソン

研究発表申し込みの締切が例年より早いので、十分お気をつけの上、厳守をお願いします。たくさんの申し込みをお待ちしています。

## 第17回田辺尚雄賞受賞者発表

第17回田辺尚雄賞は、以下のように決定いたしました。

[受賞者] 岸辺成雄

[受賞対象] 「江戸時代の琴土物語」『楽道』第618～698号、  
正派邦楽会、1993年4月～1999年12月発行

[選考経過] 今回推薦された業績は6件にのぼり、3月8日に開かれた第17回田辺尚雄賞選考委員会で慎重に審議されました。授賞式は本学会第51回大会で行われる予定です。理事会で承認された授賞理由は以下の通りです。

[授賞理由] 「江戸時代の琴土物語」は、正派邦楽会発行の月刊誌『楽道』第618号(1993年4月)より第698号(1999年12月)の間、6年8カ月にわたり連載された論考で、欠稿となった第621号と第674号を除く79号に掲載され、総頁数は約400頁に及ぶ。内容は、江戸時代から現在にいたる七絃琴に関わった人々とその楽統の解明を主軸とするが、事実上研究は江戸時代からの琴の歴史の全般に及んでいる。

表題の如く、「物語」として記述は平易であり、形は学術論文の体ではないが、周到な配慮により論拠、典拠が明示され、論文としての機能を備えている。著者と琴との関わりは戦前に始まり、古稀を迎えた1982(昭和57)年頃より集中的に調査研究が進展し、約650名の日本琴士と60張の古琴を調査、足跡は東北から九州にいたる各地に及ぶ。所謂音楽専従者ではない琴士の研究は、幅広い分野に対する深い学識が研究者に要求され、著者にして初めて為し得た研究であろう。現状は索引を欠くのが惜まれるが、今後この分野の研究の基盤をなす貴重な労作である。同時に実証的史学研究方法の良さと、厳正な研究態度に加え、衰えを知らぬ旺盛な探求心等は、後進への良き指針となっている点も高く評価される。

## 第61回通常理事会議決事項のお知らせ

2000年4月2日(日)13時より、東京芸術大学不忍荘において第61回通常理事会が開催されました。そこで審議された議事と主な議決事項をお知らせいたします。

(1) 新入会員承認の件

1999年9月1日より2000年3月31日までに申し込んだ17名の入会が正式に承認されました(氏名等は本号および前号に記載)。

(2) 平成12年度(2000年度)研究発表大会及び公開講演会の件

(本号大会案内記事を参照)

(3) 第17回「田辺尚雄賞」受賞者決定の件

(本号田辺尚雄賞記事を参照)

(4) 第18回「田辺尚雄賞」選考委員選任の件

第18回「田辺尚雄賞」選考委員に、龍村あや子、安田文吉(以上再任)、大貫紀子、岡崎淑子、柘植元一(以上新任)の5氏が選任されました。

(5) 長期会費滞納者処理の件

会費滞納者については、事務局から納入期限付きの催促状を発送し、各理事が可能な範囲で個人的にも連絡をとることになりました。

(6) 制度改革の件

第60回通常理事会および第30回通常総会において議案取り下げとなった制度改革案について、次期理事会においても継続審議することになりました。また、改革の目的を含め、次期理事会への申し送り事項を櫻井哲男制度委員会委員長を中心に作成することになりました。

## 選挙管理委員会からのお知らせ

本年は理事および監事改選の年にあたります。定款施行細則第14条第4項に「定款に定めるところの役員を通算して8期以上務めた正会員は、選挙の度ごとに本人の希望によりその1期に限ってその被選挙権を休止することができる」とあります。この条件に該当し、かつ希望する正会員は、6月30日(金)までに学会事務局選挙管理委員会宛に書面にてお申し出ください。

[平成12年度選挙管理委員]

太田暁子、尾高暁子(副委員長)、蒲生郷昭(委員長)、  
田中多佳子、松村智郁子

また、会員名簿に記載されている所属または職業の変更を、まだ事務局にお知らせくださっていない方は、変更内容を上記まで、文書でご連絡ください。

## 第36回国際アジア・北アフリカ研究会議のお知らせ

ICANAS(国際アジア・北アフリカ研究会議)日本国内委員会の第7回総会が、2月7日の午後、日本学術会議5階の第一会議室で開催されました。この総会で平成11年度の会務および会計報告にひきつづいて、「第36回ICANAS(ICANAS 2000)」が、今年の夏(8月27日～9月1日)カナダのモントリオール市で開催されることを、本学会の会員各位にも周知させてほしい旨の依頼がありました。

この研究会議での研究発表の申し込みは残念ながら、

すでに昨年の 8 月に締め切られております。さらに、この国際会議の参加登録の締め切りは今年の 5 月 1 日です。したがって、この『会報』が会員のお手許にとどく頃はすでに締め切られた後になります。とりあえず、お知らせいたします。ちなみに本学会はこの ICANAS の 31 の国内関係学・協会の一つに選ばれています。

なお、「ICANAS 2000」グループ旅行が東方学会と ICANAS 国内委員会および JTB (日本交通公社) との協賛で企画されています。お問い合わせは JTB 海外旅行虎ノ門支店営業第二課「ICANAS 2000」会議出席旅行 (電話 03-3504-3019) です。この申し込み締め切りは 7 月 27 日です。 (柘植元一)

## 日本学術会議 芸研連シンポジウムのお知らせ

芸研連 (芸術学研究連絡委員会) では、今年度のシンポジウムを下記の通り開催いたします。シンポジウムはどなたでも出席できます。みなさまのご参加をお待ちしています。

芸術学研究連絡委員会 (芸研連)・日本大学芸術学部共催  
2000 シンポジウム「20 世紀 - < 芸術 > の境界」

日時：2000 年 6 月 3 日 (土) 午後 1:00~6:00

場所：日本大学芸術学部 (江古田)

中講堂 / 視聴覚室 A / 視聴覚室 B

〔西武池袋線江古田駅下車・北口徒歩 3 分〕

< 駐車場はありません >

入場無料 (芸研連関連学・協会会員以外の一般の方は下記までお申し込み下さい。先着順。)

日本学術会議 (03) 3403-5706

日本大学芸術学部 (03) 5995-8240

趣旨：

20 世紀が過ぎ去ろうとしている。100 年・1000 年の人為的で、ある意味では恣意的でさえある時間の区切りが意味を持ちうるのは、そこに文化の本質的な区切りの兆候を重ね読むことが可能となるときではないであろうか。いまめまぐるしい展開と変貌の後の 20 世紀芸術をふりかえろうとすると、それらが暗黙のうちに前提していた不可視の枠がおぼろげに見え始めてはいないであろうか。同時代芸術の新しい様相や、ジェンダー論やポストコロニアリズム等を含むとりわけこの四半世紀の理論動向は、20 世紀の芸術の前提を相対化し、それらとの間に距離をとることを可能にしつつある。こうして 20 世紀の < 芸術 > の境界が視界に入り始めている。これは < 芸術 > に関わるある本質的な区切りの兆しなのかもしれない。

本シンポジウムは、20 世紀が何を芸術の前提として想定し、何を芸術にもたらし、どのように芸術を変容させ、

そして前提としてきたところをどのように超えようとするか - つまり、20 世紀という時代に何が芸術の境界とされてきたかを、20 世紀芸術に対する一定の距離を探り出しつつさまざまな立場から議論しようとするものである。多岐にわたるであろう上記の課題は、シンポジウムでは特に、互いに関連しあうと同時に独自の議論地平を提供する 3 つのアспект - 「自律性の神話」「テクノロジーと身体」「権力とイデオロギー」 - にしぼりこまれ、各々に関わる 3 つのセッションおよび総括のための総合討議において議論される。

日程概要

1:00 開会挨拶

芸術学研究連絡委員長 浅沼 圭司

日本大学芸術学部長 八木 信忠

1:10 企画趣旨説明 総合司会 長田 謙一

1:30~3:00 各セッション、3 本の報告 (各 20 分)

3:10~4:00 討議 (50 分)

【第 1・第 2・第 3 の各セッション並行開催】

第 1 セッション「自律性の神話」

司会 神山 彰 (日本演劇学会)

栄久庵祥二 (日本デザイン学会)

松本 俊夫 (日本映像学会)

渡辺 裕 (日本音楽学会)

第 2 セッション「テクノロジーと身体」

司会 国枝タカ子 (比較舞踊学会)

大平 智弘 (日本デザイン学会)

能沢 慧子 (服飾美学学会)

三善 晃 (日本ピアノ教育連盟)

第 3 セッション「権力とイデオロギー」

司会 井村 彰 (美学学会)

長木 誠司 (日本音楽学会)

長谷川哲哉 (美術科教育学会)

安松みゆき (美術史学会)

4:10~6:00 総合討議・質疑

パネリスト：各セッションの司会者

総合司会：長田 謙一

6:00 閉会挨拶

## 藤井知昭氏が

### 第 11 回小泉文夫音楽賞を受賞

第 11 回 (平成 11 年度) 小泉文夫音楽賞は藤井知昭氏に授与されました。授賞理由は氏の「長年にわたるアジア音楽の広汎な調査と AV メディアによるその公刊」に対してです。授賞式は東京の市ヶ谷仲之町にある安田信託銀行市ヶ谷ハウスにて、平成 12 年 4 月 4 日午後 5 時半に開催され、ひきつづき藤井氏の記念講演と祝賀パーティーが行われました。 (柘植元一)

## 故仲芳樹氏を偲ぶ

東洋音楽学会会員中関西で最古参のひとり、相愛大学名誉教授・仲芳樹先生が、あと僅かで2000年元旦を迎える1999年12月31日の夜11時41分に、吹田市内の病院で逝去されました。満88才8ヶ月のご生涯でした。大腿骨骨折等のためここ数年来殆ど外出も出来ないまま、そして最後の3ヶ月を、愛娘仲万美子さんの献身的介護を受けられての、静かな大往生であったと伺いました。

仲先生は、作曲の方では山田耕筰門下という因縁から、山田先生を中心に昭和12年発足の相愛女専音楽科に、昭和16年から奉職され、戦災から戦後の苦難を経て昭和28年の短大音楽科発足、引続き33年から大学音楽学部の教務部長、のち音楽学部長として、実質上相愛音楽部門の運営の中心的な役割を担ってこられました。作曲・理論畑としては珍しく、音楽学に深い関心と情熱をいだかれ、音楽学会関西支部の発足当初から、また東洋音楽学会でも、長らく役員として精魂こめてその振興に力を尽くしてこられました。昭和30年代から50年代末頃まで、相愛大学音楽学研究室には東洋音楽学会関西支部事務所がおかれ、関西支部の活動や全国大会などの企画にも深く関わってききましたが、そのプロモーターとしての仲先生の大きな役割を忘れることは出来ません。

また、1960年から、夏期6年間にわたって相愛大学で開催された、全国規模の参加による「宗教音楽研修会」も、相愛大学音楽学専攻の主任教授として長年ご尽力いただいた岸辺成雄先生のご支援を得て、仲先生が中心となって企画推進されたものです。この研修会には、田辺尚雄、辻莊一、岸辺成雄、吉川英史、林謙三、野村良雄、金田一春彦、黒沢隆朝、横道萬里雄、片岡義道、服部幸三、小泉文夫、皆川達夫、平野健次等々、当時の東洋音楽学会、音楽学会をまさに代表するような多数の方々の御出講を得て多大の成果を収め得たことは、今にして思えば空前絶後の大企画ではなかったでしょうか。

仲先生にとって、東洋音楽学会・日本音楽学会と相愛大学は、まさに車の両輪としてその長いご生涯の台車を支え続け、あのヴァイタリティ溢れた活動の源となってきたものではなかったかと思えてなりません。ここに先生にまつわる思い出の一端を記して、謹んで追悼の意を表します。(相愛大学名誉教授・(社)東洋音楽学会参与 酒井諄)

## 会費納入のお願い

1999年度(1999年9月1日～2000年8月31日)までの会費未納の方には、会費請求書と振替用紙を同封いたしました。

会費請求書で未納金額をお確かめのうえ、振替用紙にて早速払い込みください(振替用紙の住所・氏名欄には記載漏れのないよう、ご注意ください)。滞納がありますと機関誌をお送りできません。

会費請求書と振替用紙の同封がない方は納入済みです。

なお、本状と行き違いに納入がありました場合は、どうぞご容赦ください。

## 定例研究会開催予定

<本部>

第432回定例研究会  
2000年6月3日(土) 1時30分～4時  
上野学園日本音楽資料室

研究発表:

1、「音声言語面から見た箏箏龍笛の口唱歌」  
蒲生美津子(沖縄県立芸術大学)

2、未定

第433回定例研究会  
2000年7月1日(土) 1時30分～4時  
東京芸術大学

内容未定

第434回定例研究会  
2000年9月2日(土) 1時30分～4時  
上野学園日本音楽資料室

内容未定

<関西支部>

第199回定例研究会  
(東洋音楽学会・日本音楽学会合同例会)  
2000年6月24日(土)2時～

大阪音楽大学k号館

研究発表

(1)『『民俗』から『民族』へ:19世紀末ロシアにおける  
バラライカとドムラの形成』(仮題)

柚木 かおり

(2)「ポピュラー音楽研究から見た音楽学—その利用  
(不)可能性」(仮題)

増田 聡

<沖縄支部>

第28回定例研究会  
日時:5月下旬(調整中)  
場所:沖縄県立芸術大学  
内容:卒業論文・修士論文発表 詳細は調整中。

## 定例研究会発表募集

下記の定例研究会における研究発表(口頭)を募集します。発表希望者は、発表種別(研究発表、報告等)、発表題目、要旨(800字以内)、発表希望日、氏名、所属機関、職名、連絡先(住所、電話、Fax、E-mail等)を明記の上、学会事務所宛申し込んで下さい。

第432回 2000年6月3日(土) 1時30分～4時  
東京芸術大学

第433回 2000年7月1日(土) 1時30分～4時  
上野学園日本音楽資料室

第434回 2000年9月2日(土) 1時30分～4時  
上野学園日本音楽資料室

## 定例研究会報告

<本部>

第427回定例研究会(1999年12月4日)

(日本音楽学会関東支部との合同例会)

お茶の水女子大学共通講義棟2号館102教室

講演

楽器学再考

郡司すみ(国立音楽大学)

司会: 柘植元一(東京芸術大学)

(なお、12月例会の司会は全て柘植)

講演要旨

今回の発表の趣意は、楽器学という名に於ける教育や研究活動に関わってきた発表者の率直な感想を述べることにある。楽器学という言葉はそれ自体一般的には馴染みがなく、また、その名の下で行われている事柄の内容も様々であるため、先ずこれまでに明文化された楽器学(organology)の主要な定義を挙げ、次に楽器学の現状と諸問題を取り挙げた。

Organology という語によってこの分野が明確に定義付けられたのは Bessaraboff による 1941 年の記述 “Musicology and Organology” が最初であろうが、彼の “音楽と楽器の研究を相関関係を持つ二つのものに分ける” という考え方に対して、“楽器学は音楽学の一部” とする定義 (H.H.Draeger, 1957) も現われ、近年では両者に共通している、楽器に焦点を当てる研究方法の他に、楽器の研究が “音楽文化と音楽様式の記述と共に行われる” ことの必要性も述べられている (B.Nettle, 1964)。

発表者はこれらを背景として、主として 1) ヨーロッパ、非ヨーロッパという区分を通して見られる楽器に対する通念と、それに伴う分類の問題、2) 楽器の社会学的研究、3) 博物館・研究機関などに必要な学芸員あるいは専門家の育成について、などの問題提起を行った。

講演

日本の楽器再考

- 音具から楽器へ、そして和楽器から楽器へ -

茂手木潔子(上越教育大学)

講演要旨

今回の筆者の発表は、1999年春、新津市美術館で企画した日本の楽器の展覧会「音のはじめ 音楽の創まり」に関連して音楽学研究的立場から「日本の楽器」に関する問題を提示して再考することを目的としたものである。

当展覧会では、一般的な楽器(例: 箏、三味線、尺八など欧米音楽の楽器と共通の意識で扱える楽器)を「楽器」とカギ括弧で括り、その他の音を出すことを目的に作られた様々な道具や、結果的に出た音が伝統文化の中で意味を持つものについてはカギ括弧なしの楽器という表記で区別し、日本の音文化全体を可能な限り網羅することを試みた。展示は、a: 音を見つける(自然・生活・遊びの中での音の発見) b: 音をつくる(自然模倣音や生活・遊びに音を加える) c: 「楽器」に向かって、d:

「楽器の展開」、e: 「楽器」を超えて、の5つのカテゴリーに分類し、それぞれが段階的に関連しながら日本の楽器や音楽が形作られると考えたものだった。各分類での展示楽器例の一部を以下に示す。

a: 石笛・鬼灯・鉄瓶・火箸・俎板・下駄・数珠・羽子板・おはじき・唸り扇・花火

b: 鳥獣の笛・雨団扇・雷車・風鈴・鳴子・ポッペン・カチカチ・でんでん太鼓

c: 植物の笛・クバ三味線・玩具太鼓・歌舞伎の様々な音具

d: 雅楽や能・三曲の楽器・祭囃子の楽器

e: ガラス製の打楽器や、現代作品に現れた様々な発音具のVTR

これらの各カテゴリーの基盤には、f: 音の力(宗教と音との深い関わり) g: 記号としての音、の役割があると考え、この分類には次の楽器例等を展示した。

f: 燧石・鯛口・錫杖・土鈴

g: 法螺貝・拍子木・ツケ柝とツケ板

ここに展示された楽器数は200種類500点を超え、特に a、b の種類が最も多く、日本の発音具の種類と数の多さと日本人の音に対する発想の豊かさを改めて認識した。

展示された音具のほとんどは、これまで、「楽器」と関わりないものと考えられてきたものであるが、筆者はまな板や刀鍛冶の音、井戸水を汲み上げる鎖の音までも取り入れて音楽的效果を高めた浄瑠璃や歌舞伎の存在、算盤をリズム楽器として踊る民俗芸能の存在にも注目することによって、展示された様々な発音具に日本音楽の音色や楽器構造の基盤があると考えている。

この展示の試みの結果、日本の楽器について幾つかの特異な点が見出された。(1) 日本の楽器のなかで最も種類の多いのは打楽器(太鼓・鐘や鉦類・ガラガラや鈴の類・拍子木など打ち合わせるものの類)であること。(2) 楽器のほとんどが単音を出す楽器であること。(3) 体鳴楽器の多くが余韻の長い楽器であること。(4) 風や雨の音を模倣した楽器や鳥獣の声を模倣した楽器が多いこと。(5) 音色は倍音ではない非調和成分音を多くもつ音色が多いこと。(6) ほとんどの楽器が魔除け・厄除け・虫切りなどを目的としていたこと。(7) 同じ楽器を示す用語が多いことで、材質・音色・構造や大きさ・縁起・使用目的・設置場所・設置の様態・時代・発音の原因・表現内容・流派・源流・省略・地域性・性別等によって名称が異なる点。

これらは、日本の伝統文化で培われた豊かな発想から生み出された「多様性」を示す好例といえよう。楽器の世界を広く捉えることによって、日本の楽器の豊かさを認識でき、日本音楽の本質的な特徴を明らかにすることができるであろう。

合同例会の記録

討論は郡司氏が講演で提案された楽器学の専門家養成の必要性をめぐって行われた。楽器に関するさまざまな

側面の研究と教育が、大学レベルで行われなければならない。しかるに、わが国では楽器学の重要性がまだ認識されていず、これが大学の講座の中に正しく位置づけられていない。従来、楽器学関連の講義は全国的にもきわめて僅かで、限られた大学でしか開講されていない。したがって、人材も少ない。近年音楽に関わる新しい研究教育の分野（音楽デザイン、アートマネージメント、応用音楽学など）で専門家の養成が始まっているが、楽器学もこのような分野でしかるべき役割を果たすべきであろう。

とりわけ、近年楽器を所蔵展示する博物館が増えつつあるが、そこにしかるべき楽器学の専門的知識をもった学芸員が配置され、楽器が鳴り響いている例はきわめて少ない。さらに、わが国の博物館の学芸員の資格の取得にさいして、東西の音楽史や楽器学の基礎知識の必要性が認識されていないことも、重大な欠陥として指摘されるべきであろう。

質疑応答の中で、「楽器」と「音具」の定義や、「楽器学」なる講義を大学で開講することについての素朴な疑義も表明された。また、もともと「音楽を奏する道具としての楽器の科学的技術的側面の研究」という狭義の楽器学を、欧米の響みにならってわが国で導入することについての疑義から、楽器をめぐる多角的な研究をすべて包含するような「楽器学」に代わるより良い名称はないものか、という疑問も出された。さらに、楽器と音を直結させるあまり、音を発しなくなった「楽器」（歴史的楽器、美術工芸品としての楽器）の存在についても配慮が必要ではないか、という指摘もあった。

郡司氏と茂手木氏の講演はきわめて内容の濃いもので、教育的でかつ時宜を得たものであった。だが一方、自由討論では、広く古今東西の楽器と音具を視野に入れた「楽器」と「楽器学」の定義に関して、大方の理解と意思の疎通が得られていたのかどうか、少なからず危惧された。

( 柘植元一 )

第 428 回定例研究会 ( 2000 年 2 月 5 日 )

上野学園日本音楽資料室

研究発表

バリ島のガムラン音楽の「村落の様式」が意味するもの  
トゥンジュク村の音楽様式に関する一考察

梅田英春 ( 沖縄県立芸術大学 )

司会 : 酒井正子 ( 湘南国際女子短期大学 )

発表要旨

近年、バリ村落で演奏されるガムランの音楽の特徴は「様式」という言葉を用いて、バリでも、また国内外の研究者の間でも語られるようになってきている。しかし研究者と現地の演奏者との間ではその捉え方が異なっており、それが曖昧なまま両方で用いられている。本発表では、「村落の様式」という言葉が用いられるようになった経緯、更に現地の人々にとって「村落の様式」はどのよう

な意味をもつのかを、タバナン県トゥンジュク村のグンデル・ワヤンとよばれるガムランのレパトリーの変遷に関する資料を基に明らかにした。

現在のバリの音楽活動は村落が中心となり、口頭伝承されているため、村落間で演奏される曲の旋律、旋律の装飾法、速度、演奏技法などの一部が異なっている。しかし歴史的にバリの音楽を概観すると、こうした村落単位の音楽活動は、王国体制が崩壊した 1908 年以降のことであり、それ以前は村落ではなく、王国が音楽活動の中心であった。現在では、民族音楽学において、また現地の人々が録音するミュージックテープなどの大半は、「村落」で演奏される音楽単位で取り上げられるようになった。こうした村落の音楽的特徴と結びついた「様式」は、現在において、村落の歴史的、社会的、地理的要因に基づき、長い時間をかけて村落の中で形成され、少しずつ変化はしつつも「独立した音楽表現」と「伝統」を持つという附加価値を研究者や現地の人々に与えてしまっている。しかしトゥンジュク様式とよばれるトゥンジュク村のレパトリーの変遷を見てみると、王国崩壊以降、さまざまな村落の様式を現在まで受容し続けている。

こうした調査資料にもとづき、本発表では村落の様式が意味するものとして以下の 3 点をあげた。はじめに、村落の音楽様式は「閉鎖的で自己完結的」ではなく、多くの様式を受容した結果、現在の様式に至っているということである。次に、バリ人の解釈に基づけば、その村で演奏されている様式を指し、そのレパトリーの出自はほとんど問わないということである。そして最後に、村落の音楽様式とは村落内で長い時間をかけて構築されてきた伝統的な音楽様式でも、確立した音楽の表現でもない「創造された伝統」である。

質疑、コメント

瀬戸、川口、入江、皆川各氏より以下の質疑やコメントがあった。「様式」とは、例えばクラシックの作品を初めて聞いても誰の曲かわかる、というようなものか - 大きく北部、南部の様式は識別可能だが村レベルでは難しい / 「バリ化政策」でいう「正統性」は、現地の用語や政策としても存在するか - しない。統治者の側による / 儀礼と娯楽でレパトリーの使い分けは - ない / アメリカ人の演奏をとおして習得する場合、リズム感など違和感はないのか - 少なくともアメリカ人の側にはない。しかし結果的に元の村とフレーズやリズムが異なることはある。どの過程でそうした変化が起きたかは不明。村によっても意識や変化の度合いは様々 / アメリカ人の演奏であろうと誰であろうと「いい」と感じればどん欲に取り込み、ガムランが曲・技能の両面で村のアイデンティティのより処であることに変わりない。

以上芸能の変化とバリ人のアイデンティティの変遷を「植民地政策」と「近代」という枠組みにおいて関連づけて考察した、興味深い発表であった。様々な問題が提起され、事例の提示も綿密であった。( 酒井正子 )

## 研究発表

### ミッシングリンクの発見

雅楽から能に至る過渡期の鼓胴をめぐって

高桑いづみ(東京国立文化財研究所芸能部)

司会: 蒲生郷昭(日本大学)

### 発表要旨

一般に、能の鼓胴は雅楽から派生したと言われているが、雅楽と能では細かい点で形態に異同があるので、過渡的な形態を経て現在の鼓胴におちついた、と考えられている。筆者は平成五・六年度に実施した「雅楽古楽器の総合的調査研究(代表: 蒲生郷昭)」と、平成九年度より実施している「地方に残る雅楽・能楽の古楽器研究」のなかでさまざまな鼓胴を調査し、そのなかで過渡期と思われる鼓胴を数点発見した。その発見資料に基づき、雅楽から能への鼓胴の形態変化の流れを発表した。

岐阜県荒城神社・奈良県石上神宮・京都府多治神社・香川県神谷神社には、法相華文のかわりに黒漆をほどこした鼓胴が所蔵されている。雅楽鼓特有の鬘(乳袋上に突起した環)の代わりに線を彫りこんだ特異な形態で、線刻がなければ能の鼓胴、と言っても差し支えないほど能の鼓胴に近く、雅楽から能へ移行する過渡期の作例と考えられる。荒城神社蔵の一筒を除くと規格がほぼ一定で、過渡期の段階ですでにある程度形態の規格化が進んでいたことがうかがえる。多武峰の鼓胴職人が弘安年中に鼓胴の規格を定めた、とする『匡職抄』の記事に沿うのが興味深い。ただ、乳袋の開き具合や内部の細工を見てみると、外形ほど一様ではない。石上神宮の鼓胴は古態を残しているし、乳袋内を削って調整した跡の見える多治神社、神谷神社の鼓胴はより一層能に近く、形状の変遷がうかがえる。

福山市沼名前神社には、この線刻の鼓胴に蒔絵を施したタイプが所蔵されていた。黒漆だけの状態で相当長い期間使用した後、能への転用を意図して蒔絵を施したもののらしい。雅楽・中世芸能から能の囃子へ、鼓胴の流れを示す貴重な作例である。大鼓風の形状をしているのに小鼓の寸法しかないが、『四座役者目録』には大鼓胴から小鼓胴に作り直した、という記事もあり、大鼓から小鼓が派生した可能性を示唆する作例としても注目したい。

### 質疑応答

初めに、実物の鼓胴と文献とを多く用いた綿密で、かつ貴重な実証的研究であるとの感想が述べられた。続いて、中世芸能の鼓と能の鼓とは明確に分けられるものなのかという質問が出された。世阿弥の時代の能面に過渡的な物があるのと同様、両者の境界線は曖昧で、中間的な形の鼓も能に使われていたと推測できるということであった。他には、鼓胴の内部において、棹の部分と乳袋の部分が曲線でつながっているものと角張っているものとの音色の違いに関して、また、真黒な鼓胴で蒔絵がほどこされている物の製作年代に関する質問が出された。

内部構造と音色の関連に関しては、なだらかなものの方が能に適した柔らかい音ができるということだ。また、真黒な鼓胴の大部分は室町期のものであり蒔絵は室町期に多いのだが、元は黒かったものに手を加えて蒔絵を施したものもあり、鼓胴そのものの製作年代は装飾からのみでは判断できないということであった。

(土田牧子・森田都紀)

## 会員異動(名簿記載事項の訂正・変更・追加)



住所・所属等に変更がありましたら、事務局までご連絡ください(機関誌別冊会員名簿とじ込みの変更届用はがきをご利用ください)。  
改姓・改名のお届けには、ご希望の表記法をお書き添えください(複数表記される場合、どちらを主にするか等)。  
事務局には登録するが、会員への公表を希望されない情報等がある場合には、その旨明記してください。

## 図書・資料等の受贈

(1999年12月~2000年3月、到着順)

- 『復印東皐琴譜』 東京琴社(坂田古典音楽研究所)
  - 『猿田彦大神フォーラム年報「あらはれ」』第2号  
猿田彦神社/猿田彦大神フォーラム
  - 『民俗芸能研究』第29号 民俗芸能学会
  - 『日本民俗学文献目録データベース』(CD)  
国立歴史民俗博物館
  - 『ぎふ民俗音楽』第48号 岐阜県民俗音楽学会
  - 『楽道』12,1,2,3月号 正派邦楽会
  - 『白い国の詩』12,1,2,3月号 東北電力(株)地域交流部
  - 『月刊みんぱく』12,1,2,3月号 国立民族学博物館
  - 『ボン カンピソシ』5(イノミ 祈る)  
北海道立アイヌ民族文化研究センター
  - 『音楽学』第45巻1号 日本音楽学会
  - 『日本音楽学会関東支部通信』第53号  
日本音楽学会関東支部
  - 『浜松市楽器博物館だより』No.18 浜松市楽器博物館
  - 『MLAJ Newsletter』Vol.20 No.3, No.4  
音楽図書館協議会
  - 『アジアセンターニュース』No.14  
国際交流基金アジアセンター
  - 『竹内道敬寄託文庫目録(その十)追加篇(三)江戸長唄の部』  
国立音楽大学附属図書館
  - 『自然の音・文化の音 - 環境との響きあい - 』  
山田陽一編 昭和堂
  - 『楽器からのメッセージ - 音と楽器の人類学 - 』  
西岡信雄著 音楽之友社
  - 『それは仏教唱歌から始まった - 戦前仏教洋楽事情 - 』  
飛鳥寛栗著 樹心社、(発売)星雲社
  - 『日本大学芸術学部紀要』第31号 日本大学芸術学部
  - 『日本大学芸術学部紀要 創作篇』vol.24  
日本大学芸術学部
  - 『年報音楽研究』第16巻 大阪音楽大学
- ## 新刊書籍
- 『アジアの人形芸』諏訪春雄編、勉誠出版、¥2,300(遊学叢書6)
  - 『奄美のシマウタへの招待』小川学夫著、春苑堂書店、¥1,500(かごしま文庫55)
  - 『石水博物館(三重県津市)所蔵の番付及び絵番付のデータベース作成』愛知教育大学教育学部
  - 『一乗寺鉄扇音頭集』一乗寺郷土芸能保存会
  - 『江戸瓦版はやりうた七十種』玩究隠士校注、太平書屋、¥8,000(俗謡叢書4)
  - 『欧米人が聞いた日本の音 元禄中期から明治中期まで』  
茂手木潔子監修、上越教育大学大学院音楽学研究室
  - 『大波野神舞台本 田布施町無形民俗文化財』田布施町立田布施図書館編、田布施町立田布施図書館(田布施図書館叢書26)
  - 『小杖祭りの祭礼芸能 滋賀県選択無形民俗文化財調査報告書』小杖祭り保存会編、小杖祭り保存会
  - 『尾張名古屋芝居番付』鷲野文吉著、愛知県郷土資料刊行会、¥6,800
  - 『音楽ジャンルって何だろう』みつとみ俊郎著、新潮社、¥1,100(新潮選書)
  - 『歌舞伎&KABUKI』森真琴著、角川書店、¥1,200(ロカスなるほどシリーズ 芸能と音楽)
  - 『歌舞伎の歴史』今尾哲也著、岩波書店、¥660
  - 『上方浮世絵の再発見』松平進著、講談社、¥3,200
  - 『神と舞う俳優たち 伝承芸能の民俗』須藤功著、青弓社、¥2,000
  - 『歌謡 文学との交響』国文学研究資料館編、臨川書店、¥2,400(古典講演シリーズ4)
  - 『歌謡文学を学ぶ人のために』小野恭靖編、世界思想社、¥2,300
  - 『河竹登志夫歌舞伎論集』河竹登志夫著、演劇出版社、¥5,000
  - 『巫覡・盲僧の伝承世界 第一集』福田晃・荒木博之編、三弥井書店、¥9,300
  - 『雅楽入門』増本伎共子著、音楽之友社、¥1,800
  - 『楽器からのメッセージ』西岡信雄著、音楽之友社、¥2,400
  - 『狂言茂山千五郎家 笑門来福』婦人画報社、¥1,524(FG mook)
  - 『京都音風景 CD book no.2 声明の語らい 癒しの音』  
大橋智夫編、紫翠会出版、¥1,905
  - 『近世歌謡の諸相と環境』小野恭靖著、笠間書院、¥17,000(笠間叢書326)
  - 『近世の芸能興行と地域社会』神田由築著、東京大学出

- 版会、¥5,200
- 『芸能の中世』五味文彦編、吉川弘文館、¥6,000
- 『芸能の文明開化』倉田喜弘著、平凡社、¥2,600 (平凡社選書 200)
- 『劇評家の椅子 歌舞伎を見る』渡辺保著、朝日新聞社、¥2,000
- 『口訳日本民謡集』仲井幸二郎著、蒼洋社、¥2,800
- 『鼓響は未来へ2 佐野太鼓創設 20 周年記念誌』佐野太鼓保存協力会編、佐野太鼓保存協力会
- 『国立劇場 30 年の公演記録 演芸・大衆芸能講演篇』国立劇場調査養成部情報システム室編、日本芸術文化振興会
- 『心に響く民謡百景』菊池淡狂著、日本民謡協会出版部、¥1,905
- 『子ども舞台芸術ガイド 2000』同編集委員会編、芸団協・芸能文化情報センター芸団協出版部、¥1,000
- 『「桜ヶ池のお櫃納め」と佐倉の民俗 浜岡町佐倉地区民俗調査報告書』浜岡町教育委員会編、浜岡町教育委員会
- 『ザ・いやほんガイド』久門郁夫企画・監修、朝日解説事業
- 『庄内地方の祭と芸能』五十嵐文蔵著、阿部久書店、¥3,800
- 『声明マングラのきらめき 舞楽法要庭儀曼茶羅供』天納伝中著、春秋社、CD 付き ¥2,800
- 『慈恩寺舞楽解説』寒江江市
- 『授業のための日本の音楽・世界の音楽』島崎篤子・加藤富美子著、音楽之友社、¥2,500
- 『縄文の音』土取利行著、青土社、¥2,200
- 『浄瑠璃作品要説 8 錦文流ほか篇』国立劇場調査養成部芸能調査室編、日本芸術文化振興会
- 『西洋の夢幻能』成恵卿著、河出書房新社、¥2,900
- 『説教節を読む』水上勉著、新潮社、¥2,700
- 『それは仏教唱歌から始まった 戦前仏教洋楽事情』飛鳥寛栗著、樹心社、(発売) 星雲社、¥2,600
- 『タイ・演歌の王国』大内治著、現代書館、¥2,200
- 『宝塚歌劇の変容と日本近代』渡辺裕著、新書館、¥2,400
- 『中世京都と祇園祭 疫神と都市の生活』脇田晴子著、中央公論新社、¥780 (中公新書)
- 『中世の歌謡』真鍋昌弘著、翰林書房、¥2,400
- 『天平勝宝のインド舞踊 印度曼陀羅破門講座』河野亮仙著、出帆新社、¥1,800 (いんど・いんどシリーズ 6)
- 『伝統舞踊岡本っこ(岡本新内)舞踊考』伊沢美佐子著、彦栄堂
- 『東海道四谷怪談』諏訪春雄編著、白水社、¥4,200 (歌舞伎オン・ステージ 18)
- 『都山流百年史 楽会三十年史』都山流史編纂委員会編、都山流尺八楽会、2 冊
- 『銅鐸博物館 10 年の歩み 野洲町立歴史民俗資料館概要』銅鐸博物館編、銅鐸博物館
- 『中島雅楽之都先生略伝 8』吉田熙生著、正派邦楽会
- 『長崎県文化百選 5 (祭り・行事編)』長崎県編、長崎新聞社、¥1,334
- 『南島歌謡の研究』狩俣恵一著、慶友社、CD 付き ¥13,800
- 『日本のふれ唄 1』宮内仁著、近代文芸社、¥1,800
- 『日本のふれ唄 2』宮内仁著、近代文芸社、¥1,800
- 『日本のふれ唄 3』宮内仁著、近代文芸社、¥1,800
- 『念仏和讃御詠歌集 沼能家蔵念仏和讃集・加藤家蔵仏閣巡拝記』芳賀町史編さん委員会編、芳賀町(芳賀町史報告書 4)
- 『能と精神分析』金関猛著、平凡社、¥2,800 (平凡社選書 196)
- 『能と義経 シテが語る』桜間金記著、光芒社、¥2,500
- 『能の平家物語』秦恒平(文)・堀上謙(写真)著、朝日ソノラマ、¥3,200
- 『能の理念と作品』味方健著、和泉書院、¥10,000 (研究叢書 240)
- 『はじめの尺八』善養寺恵介著、音楽之友社、CD 付き ¥3,500
- 『長谷ささら踊り盆唄に関する資料調査報告書』厚木市教育委員会生涯学習課文化財保護係編、厚木市教育委員会
- 『羽村の祭り写真集』羽村の祭ばやし保存連合会編、羽村の祭ばやし保存連合会、¥1,500
- 『飛騨の民話・唄・遊び 岐阜県朝日村・高根村の伝承』鶴野祐介監修、手帖舎、¥2,500
- 『「日の丸・君が代」と日本』松本健一著、論創社、¥1,800
- 『美と楽の縄文人』小山修三著、扶桑社、¥1,524
- 『舞台芸術の鑑賞行動調査報告書』日本芸能実演家団体協議会芸術文化情報センター編、日本芸能実演家団体協議会芸術文化情報センター、¥5,000
- 『平家物語の歴史と芸能』兵藤裕己著、吉川弘文館、¥8,000
- 『宝生流点字謡曲初級本 その 1』田辺建雄編著、光ある記録の会(光ある記録シリーズ 6)
- 『舞阪大太鼓まつり』舞阪町立郷土資料館編、舞阪町立郷土資料館(舞阪町立郷土資料館資料集 5)
- 『南九州の民俗仮面』向山勝貞著、春苑堂書店、¥1,500 (かごしま文庫 57)
- 『宮城道雄音楽作品目録』千葉潤之介・千葉優子編著、宮城道雄記念館、¥9,000
- 『民俗芸能・民家・用水』芳賀町史編さん委員会編、芳賀町(芳賀町史報告書 3)
- 『民謡録音資料目録 北海道・東北篇』民族芸術研究所、¥2,600
- 『盛岡さんさ物語 盛岡さんさ踊り二十周年記念誌』盛岡さんさ踊り実行委員会、¥2,500
- 『盛岡の民俗芸能』発刊委員会編、盛岡市無形民俗文化財保存連絡協議会

『八重山芸能文化論』森田孫榮著、森田孫榮先生論文集  
刊行事業委員会、¥13,800

『山梨の民俗芸能』水木亮著、勉誠出版、¥1,800

『琉球列島島うた紀行 第3集』仲宗根幸市編著、琉球  
新報社、¥2,000

『六世野村万蔵 狂言の道』野村万蔵著、日本図書セン  
ター、¥1,800

『わがみちのく郷土芸能 早池峰神楽・鹿踊・鬼剣舞』  
粒針修著、錦正社、¥1,800

『わたくしの国の旗と歌』友常貴仁著、三五館、¥1,000

## 新発売視聴覚資料

コンパクト・ディスク

『永平寺の朝 大梵鐘と般若心経』日本コロムビア  
COCJ-30352、¥2,940

『SP 盤による沖縄民謡集(上)』日本コロムビア  
COCJ-30859~60、¥4,725

『SP 盤による沖縄民謡集(下)』日本コロムビア  
COCJ-30861~2、¥4,725

『雅楽 天・地・空 千年の悠雅(東儀秀樹)』東芝 EMI  
TOC-24293、¥2,854

『雅楽集(伶楽舎)』日本コロムビア COCJ-30793~4、  
¥5,250

『三世・四世今藤長十郎全集』メディア・ウィザード、  
¥38,850

『深海さとみ箏曲地歌集』日本クラウン CRCM-60043~5、  
¥8,500

『萬福寺の梵唄 黄檗宗 声明の世界』日本コロムビア  
COCJ-30462、¥2,940

『密蔵浄土 天台声明 合行曼陀羅供』Ebisu Ebisu 7、  
¥3,059

『ジャワ くつろぎの宮廷ガムラン』

『バリ 彩りのガムラン&ケチャ』

『ヒマラヤ 大自然への讃歌』

『チベット 荘厳チベット声明』

『ブルガリア 神秘の歌声』

『ジンバブエ 哀愁のムビラ』

『ケニア 魂の叫び、戦いと祈りの歌』

『ペルー インカへの郷愁』

『バハマ 喜びの歌、心の歌』以上、ワーナーミュージック  
WPCS-10271~9、各¥1,050

『日本伝統音楽1 長唄』

『日本伝統音楽2 義太夫』

『日本伝統音楽3 箏曲・地歌・尺八』

『日本伝統音楽4 古曲・常磐津・新内・大和楽』

『日本伝統音楽5 歌舞伎』以上、日本コロムビア  
COCJ-30691~5、各¥2,100

ビデオテープ (VHS)

『シリーズ現代の狂言 人間国宝茂山千作』森崎事務  
所、全3集、各¥5,000

『舞楽(宮内庁式部職楽部)』日本コロムビア  
COVF-6372、¥3,500

## 前号の訂正とお詫び

前号5頁の記事見出しで「芝祐靖氏がポーラ賞を受  
賞」とすべき箇所が、誤って芝祐泰氏と表記されていま  
した。訂正しお詫び申し上げます。

また、同頁「参与故押田良久氏を偲ぶ」2行目の「本  
年1月15日」を「昨年11月15日」と訂正させていた  
だき、重ねてお詫び申し上げます。

## 編集後記

学会内部での情報提供の方法も会報、支部便り、ホー  
ムページと多様化してきています。会員の皆様のご希望  
にあった形を模索しています。ご意見やアイデアをお  
寄せください。

経験者がほとんどいない状態でスタートした今期の編  
集委員会も、参事委員の献身的な努力でどうやら軌道に  
のってきました。

会報編集委員会

理事：薦田治子、野川美穂子

参事：太田暁子、小塩さとみ、甲斐朋江、金光真理子、  
北岡朱実、竹内有一、福田千絵、前原恵美、増野亜子、  
松村智郁子、三上康子